実践研究助成

小学校

研究課題

電子カルテの活用により教育の精度を高める

副題

軽度発達障害・不登校傾向等の子どもたちの支援事例を中心として

学校名	**西尾市立西尾小学校**
所在地	〒445-0864 愛知県西尾市錦城町162-1
学級数	23
児童･生徒数	734名
職員数／会員数	35名
学校長	冨田　晃
研究代表者	伊藤　吉弘
ホームページアドレス	intraj1@intra.city.nishio.aichi.jp

１．はじめに

西尾小学校では、「児童一人ひとりの把握、指導、評価にカルテがとても有効である」と考え、はっとした「この子」の現象を記録する電子カルテ「E-School」（本校の教育補助員：名倉満雄氏が開発した教育支援コンピュータソフトウェア）を平成17年度より活用している。この電子カルテ「E-School」は、「連絡関係」「児童名簿の管理」「設備備品管理」「成績処理」「会計処理」の校務も含めた総合的な教育支援ソフトウェアである。安全対策については、通常の安全対策の上に、システムソフトとデータを分離したので、万一システムソフトをインストールしたコンピュータが紛失・盗難されてもデータ流出の恐れがない。

平成17年度は電子カルテに入力できる情報は文字に限られていたが、平成18年度は「松下教育研究財団」の研究助成により、電子カルテに新たに映像情報（児童の絵、作文等）を保存できるように改良した。

軽度発達障害や不登校傾向等の問題をもつ子どもたちは、ここ数年増え続けている。今まで問題をもつ子の対策として、会議や研修会を行っているが、学級担任と養護教諭に多くの負担がかかっているのが現状である。本研究は、電子カルテを活用し、教職員が事例ごとにチームを組んで支援をしていこうとする試みである。

２．研究の目的

電子カルテの活用により「すべての職員が、日常の教育実践の中で、はっとした『この子』の現象を入力・累積し、その情報を相互に共有・解釈・交流することで、『この子』についての理解の幅と深さは、いっそう高まり、ひいては『この子』の行動特性が解明できる。この行動特性にかかわる情報を共有し、全校体制で実践を積んでいけば、軽度発達障害・不登校傾向等の子どもについて西尾小学校の教育精度は格段に高まる。」と考え、「この子」の成長を見守り「この子」に適した質の高い支援をすることを研究の目的とした。

３．研究の方法

電子カルテを活用するのに、特に大きくかかわるのは、保健室の養護教諭である。電子式「保健・執務日誌」へ記入するための情報が、リアルタイムで職員に公開されるので、保健室の情報を学級担任がつかむことができる。そして、養護

教諭にとって気になる子は、各学級担任の抽出児童にもなっているので、保健室以外の情報と照らし合わせ、その情報を解釈し、総合的に判断できることになる。また、養護教諭が中心となり「この子」についての現象を検討し、作成した資料を基に、すべての教職員で「この子」を理解し支援していくための会議を行っている。そして、単に職員がリアルタイムで情報交換ができるというレベルから、職員同士の情報の交流ができ、チームとして「この子」を支援するという高いレベルの教師集団が形成されつつある。

４．研究の内容

(1) 軽度発達障害の児童Ａの支援事例

電子カルテに入力された軽度発達障害の児童Ａに関するデータは207件ある。その中から４件を取り出し、考察する。

2005/06/07「アオムシはさわれない」　お堀池に、突然現れた。みんなどこかへ行ってしまい迷子になったという。クレソンについたアオムシを、カワムツの池に放り投げると、猛スピードで食べることを知らせたら、びっくりしていた。「Ａ君もやってみな。」といったが、もじもじしているばかりであった。どうやらアオムシはさわれないようである。

2005/06/20までの現象から、「児童Ａは頭の回転が速く興味あることに熱中するが、集団での行動は苦手でいやなことに強く反応する」と特徴を理解し、行動特性が解明できた。

2005/06/23「タナゴとヨシノボリ」　始業前、校長室へ、重い水槽を持ってきてくれた。中にはタナゴが10匹、ヨシノボリが１匹、タニシが１つ、水草が２つ入っていた。おじいちゃんが飼っていたものをくださったのだ。「どこに入れるのかな？」と聞くので「昨日、保健室の前に用意しておいたタライに入れるんだよ。」というと、「じゃあ、僕も見に行きます。」といってついてきた。妹のＢさんも一緒であった。

2005/07/06までの現象から、「児童Ａは『タナゴ』に関心が高く、知識も豊富であることがわかり、児童Ａへの支援は『タナゴ』をキーワードとするとよい」と考え、７月の職員会議にてすべての教職員で共通理解をした。これで、児童Ａへの支援体制が整った。

2005/08/30「お片づけができなくて家出」午前10時頃、パジャマにサンダル姿のＡ君が職員室に入って来た。「ぼく、がまんできなくて家出して来た。」と言い、Ｃ先生が話を聞いてくださった。母親から自分のおもちゃを片づけるように言われていたが、やらずにいて、母親に叱られたらしい。家に連絡をとり、学校の中を回り、保健室のタナゴを見て、心が落ち着いたところで、家に帰った。担任が学校にいなかったので、Ｃ先生と生徒指導のＤ先生に対応していただいた。

上記の現象は、夏休みに児童Ａが家出をして学校へ来た時、担任でない職員が児童Ａに応対し、児童Ａへの支援キーワード『タナゴ』により、大事に至らなかった事例となった。

2006/09/11「Ｅ君と話したかった」　登校時気分が高ぶり職員室に来る。保健室で気持ちを落ち着かせ、担任が「怒ってしまった理由」を訊ねたところ、「Ｅ君と話したかったのに、他の子がＥ君に話しかけてしまい話ができなかったこと、集合場所で遊具に乗っていたら、友だちに注意されたこと」であった。しばらく、水まきをして教室へ戻っていった。今まで、Ａ君から友だちの名前が出たことはほとんどなかった。自分から友だちを求めている姿にＡ君の成長ぶりを感じた。

上記の現象、児童Ａから「Ｅ君」の名前が出て、友だちと関われる状態へと変化させることができたことは、大きな成果であった。

(2) 不登校傾向の児童Ｆの支援事例

電子カルテに入力された不登校傾向の児童Ｆに関するデータは215件ある。その中から５件を取り出し、考察する。

2005/11/22　　母親から電話。「車で学校に行くが、車から降りないと言っているのでよろしく」とのこと。ロータリーで待っていたら到着したので、声をかけると、ふとんが山積みされている後部座席の下にもぐっていて、「早く行け」と母親に命令している。顔を見せる気配は全くなし。

2005/11/22までの現象より、担任が家庭訪問し児童Ｆを欠席させないようにしてきたが、児童Ｆが10月から登校しぶりの状況が悪化し、担任と保護者だけでは対応できなくなって

きたことがわかる。そこで、すべての職員で児童Ｆを支援していこうと学校体制を整えた。

2005/11/29　母親と車で登校。事前に母親と打ち合わせ、強行手段。教頭先生の協力で降ろし保健室に入る。Ｇ先生も協力。かなりの抵抗で暴れ、一瞬の隙に裸足で逃げ出してしまった。
2005/12/02　いつもの時間に登校。「校長先生をお呼びするから、顔出してすわっていてね」と声をかけると、起きあがった。校長先生からいろいろ話しかけていただく。ビオトープでザリガニつかみの話に反応。「裸足でも、足痛くない」と言って、降りてきた。

2005/12/02まで児童Ｆに対して、すべての職員で支援していこうとはするものの、なかなか児童Ｆの心をほぐすことができなかった。しかし、上記現象の校長先生の「ザリガニ」ということばに反応し、児童Ｆが自分から動いたことで、児童Ｆの支援の糸口をつかんだ。

2005/12/09　城址公園の途中で、「今日は、とても急な崖を登るので、H君（弟）とお母さんとは、ここで別れて、先生と二人で行こうね。」というと、素直にうなずいた。そこで、お城の南側の、とても急な崖に向かった。「さあ、ここだよ。自分でコースを決めて上まで登ってみな。」というと、即座に登り始めた。竹や木の根っこを、じょうずにつかんで、あっという間に登り切った。ドングリ拾いをしておられたＩ先生に再会すると、早速報告。「あのねえ。落ちると死ぬようながけを登ったよ。」得意満面のＦ君であった。帰りに、よいこはここで遊ばないの看板をまじまじと見つめていた。

上記の現象より、児童Ｆに自然の中での遊びと目標を持たせ成就感を味わせるための支援がされた。自然と接する中で児童Ｆの心がほぐれていく様子がうかがわれる。児童Ｆの変容が見られ、「一人卒業式」が、２月３日校長室で校長、担任、教頭、教務、校務、養護教諭、事務職員、栄養技師、用務員、母親が見守るなか行われた。

2006/05/12　年度当初から、とても不登校傾向だったとは思えないほど元気な様子でした。授業中も積極的に発言してくれますし、放課後も男女に関わらず誰とでも楽しそうに過ごしていました。５月12日現在で、全出席です。

不登校傾向の児童Ｆが、職員の支援や自然の力により元気になった事例となった。

５．研究の経過

平成17年度の電子カルテの文字情報は、約3,000件であった。平成18年度の電子カルテの文字情報は、10,000件を越した。松下教育財団の助成により映像情報が保存できるようになり、全校児童の「絵をかく会」「競書会」「版画」の作品が映像データとなった。その他、児童の作品「絵日記（１学級）個人写真（２学級）絵手紙（１学級）自然学習作品（１学級）美術展作品（２学級）町学習ポスター（１学級）職人さん新聞（１学級）職人さんお礼の手紙（１学級）」や学校関係「西尾小学校関連新聞記事（66件）事務文書（一部）」の映像データ化ができた。また、職員会議や研究会議において、これまで紙であった資料が画像でできるようなり、ペーパーレス化が進んだ。

６．研究の成果と今後の課題

電子カルテに入力された、日常の教育実践の中で、はっとした「この子」の現象は、すべての職員がリアルタイムに情報を共有することができ、「この子」の理解の幅が高まった。そして、10,000件を越すデータをもとに、「この子」の現象をつなぎ合わせ、職員一人ひとりが解釈し、解釈の違いから職員同士の交流が生まれ、「この子」についての理解の深さが高まった。「この子」の行動特性を解明し、「この子」に適した支援をすることができた事例を「錦が丘紀要第20集（別冊）」にまとめた。「この子」の成長をすべての職員で見守り、支援していこうとする意識が高揚し、西尾小学校の教育の精度は着実に高まってきている。

映像情報については、平成18年度から全校児童の「絵をかく会」「競書会」「版画」の作品が映像データとなった。これを６年間継続していくと、「この子」の成長を映像からも読み取ることができ、文字情報と映像情報を総合して、一人ひとりの子どもの理解を深めることができる。今後、電子カルテを、軽度発達障害・登校しぶり・母子分離不安・自信喪失等の特別な支援を必要とする児童のために「あゆみの記録」を深化させた「個別支援カルテ」を開発し、プロフィールだけでなく、「目標→支援→評価」のサイクルで「この子」の育ちを促していく。また、「カリキュラムの実践」を大きくサポートできる教育支援ソフトウェアとして開発する。そして、すべての職員が「カルテの哲学」を学び直し、子ども理解の深度を高め、真の意味での教師集団を形成していくことが今後の課題である。